

で、もう少しフレーズと拍子に対しての意識をもって学んで欲しいということである。合理的な運指を用いて技巧面で完成されていても、機械的な演奏では、人間が奏でる音楽としての魅力に欠ける。効率の良い運指を考えるとということは、音楽表現をしやすいとする為の補助的な役割りなのであり、その先は譜面からあらゆることを読み取り、その作品のモチ味を十分に表現して欲しいのである。その音楽表現の基本となるフレーズと拍子の扱いに対する認識を新たに、バランスのとれた演奏となるように心がけて欲しいものである。

引用文献

- ・楽譜は音楽教育研究協会編 音楽科教育法

参考文献

- ・リーベルマン著 現代ピアノ演奏テクニック
林 万里子訳 P. 38 66 67 音楽之友社
1978年
- ・井口基成著 ピアノ奏法の段階 音楽之友社
1955年
- ・下山望著 ピアノ運指法 ムジカノーヴァ
1986年
- ・ジェラルド・ムーア著 歌手と伴奏者 大島
正泰訳 音楽之友社
1960年

「冬げしき」 譜例 6 3度の平進行のところで
は右手 d を第2指で取ったばあい、h は左手で
補助すると指が足りないというような不安は解
消される。5小節目は譜例4と同様に a を第5
指から第4指に置き換えをすると流れがスム
ーズになる。

譜例 6

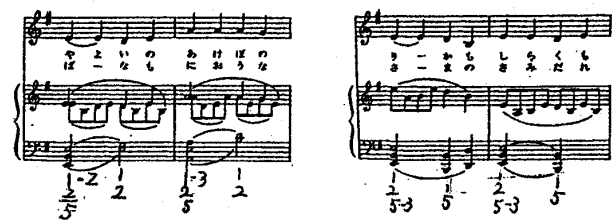


「越天楽今様」 この曲では左手伴奏部が前奏を
除いてはすべて和音で構成されていて、しかも
跳躍が多い。このばあいには、上行に跳躍をし
ている箇所は和音の一番上の音を、下行に跳躍
をしている箇所は和音の一番下の音を、それぞ
れ譜例7で示すように置き換えをすると、レ
ガードでなめらかな響きで奏することができる。

譜例 7

〔上行〕

〔下行〕



「おぼろ月夜」前奏部 譜例 8 では第 $\frac{5}{1}$, $\frac{5}{1}$ 指で
は少しレガードに欠けるので、c を第5指から
第4指に置き換えると次の e になめらかに移る
ことができる。

譜例 8



譜例 9 では譜例 5 のときと同様に、右手低音
域の和音を弾くのに少し手首に無理が生じるの
で、下の2つの音を左手で補助することにより、
らくに奏することができる。

譜例 9



Ⅲ おわりに

前にも述べたように、指づかいには数学のよ
うに決まった答えはないのであり、ひとりひと
りの指の大きさや、かたちによって異なるもの
である。

上記に取り上げた指づかいは、多年にわたる
学生の指導を重ねてきた経験を基に、彼らの
個々の技術力、及び手の条件を考慮した上で設
定したものであり、学習の中の一環として取り
上げていただければ幸いである。なお、ここ
では運指に重点を置いて説明をしてきたわけだが、
最後に次のことをつけ加えさせていただきたい。
それは、歌唱教材あるいはピアノ教材を学ぶ上

ここに、学習段階で困難と思われる歌唱教材を取り上げ、音楽の流れを損うことのないように熟慮した上で、少しでも弾きやすく、また効率のよい運指を明記しておく。

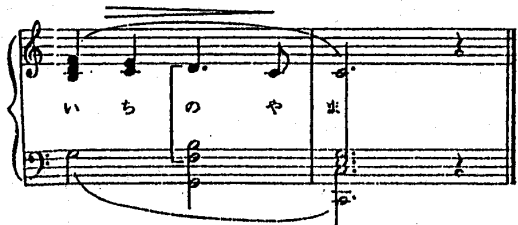
「ふじ山」譜例1では、前奏2小節目の右手和音の連続をできるだけなめらかに奏するには、2拍目を第 $\frac{5}{1}$ 、 $\frac{4}{1}$ 指で取るとよい。そのばあい、第5指を少し右に寝かせるようにして、その上を第4指が通るように動かすと弾きやすい。また、次の小節も同様に3拍目に移るとき、前の和音の第3指をはやく上げて、第1指を軸に左に少し寝かせながら第 $\frac{5}{3}$ 指を上から回転させると次の音へらくにつながる。

譜例 1



譜例 2 では左手10度と広い音域を同時に奏することは困難であり、このばあいには一番上の音 h、または f までを右手が補助をするとたやすく弾くことができる。

譜例 2



「茶つみ」譜例 3 では部分的に大きな跳躍ができるばあいがあるが、そのときはもう一方の手ができる範囲で補助をするとよい。3 拍目の和

音を右手で取ることにより余裕をもって奏することができる。

譜例 3



譜例 4 では 3 拍目の和音の一番上の音 a を第 5 指で取るならば、第 4 指に置き換えをしておくと次の h になめらかに移ることができる。

譜例 4



「まきばの朝」譜例5では右手和音の下の音gが低音部にあり、手首がくの字のようになって少し苦しいことと、次の音がかなり跳躍をしているので、左手がgを補助すると弾きやすく、次の和音に余裕をもって移ることができる。

譜例 5



ピアノの運指とその扱いについて

竹 内 アンナ

Piano Fingering : Various Strategies

Anna Takeuchi

I はじめに

ピアノ学習者にとって、指づかいの選択は扱いにくい問題のひとつである。特に、初歩的段階にある者は、指づかいまで考えが及ばず、それが楽曲に不合理であってもおかまいなしに夢中で弾いてしまう。もし、不合理な指づかいで練習をはじめてしまうと、最終段階で実際のテンポで演奏を行ったばあいには、指を移行させるときに無理が生じて、音の流れにムラが起き、音響のなめらかさがそこなわれてしまうのである。音響のなめらかさとは、音の移りかわりにおける時間と強さに関する均等性を意味するのであり、そこに合理的な指づかいによる効率のよい演奏が望まれる。

完成された演奏とは、その作品のもつ技術的目的と音楽的目的とが一致することによってその演奏芸術としての真価が認められるものであろう。そこには音楽表現を影で支えるもののひとつとして、運指の技が大きく左右すると言っても欠して過言ではないと思う。それだけに学習者は、運指というものを作品をつくりあげる上で大切な問題として取り扱っていただきたいのである。

II 合理的な運指の応用例

これから取り上げる歌唱教材の弾き歌いによる伴奏のばあいには、不合理な指づかいが歌唱の流れを妨げかねないのであり、多くの学生が合理的な運指を用得ないために、歌えるはずの歌唱教材をつまづき中断することもしばしば起こる。

では、初めの練習段階でどのような点に注意をして指づかいの選択をしたらよいかである。指づかいには原則的なやり方はあっても、必ずこの指づかいで弾かなければいけないというきまりはないのであるから、簡単に言えば演奏者の弾きやすい指づかいが一番よいと言えるかも知れない。しかし、そこに本人が気付かない無理な指づかいによる強引な演奏になっているようでは、良い演奏とは言えないのである。学習者はまずゆっくりしたテンポで片手ずつ練習をはじめ、「どの指が」「どこで」助けを必要としているかをよく認識してから指の動きを設定するとよい。ただし、その設定段階では幾通りもの方法を試み、そこから自分に合った合理的な指づかいを決めるべきである。